

# 東日本大震災におけるアレルギー患者家族の支援活動・最終報告

認定 NPO 法人 アレルギー支援ネットワーク

2011年3月11日の東日本大震災後、被災されたアレルギー患者家族のために、全国の多くの皆さまから支援金をいただきました。また、全国より73名のボランティアさんが、被災地へバイクや車で向かい患者家族の方への直接支援を、名古屋の事務局においては後方支援業務を担い、私どもの活動を支えてくださいました。いただいた支援金は、2014年3月末までにすべて支援活動に使わせていただきましたので報告をもちまして御礼にかえさせていただきます。誠にありがとうございました。

## 2011年度の活動

### 1. 第1ステージ（発災時～1ヵ月）

#### 1) 「助けてください」とのメール

3月11日22時10分、「支援ネット」に最初のSOSのメールが届いた。「たすけてください。友人が仙台のS小学校に避難しています。年長の男の子で、卵・甲殻類のアレルギーがあります。支援物資を届けていただけないでしょうか」。

発災後24時間で10件のSOSが届き、名古屋の事務所では情報の収集と支援物資の配送準備が始まった。災害担当理事や事務局長は、たまたま新潟県で打合せのため不在であったが、東海地震を想定して前年に行っていた訓練（①災害担当役員が名古屋不在中の災害発生。②遠距離地域からSOSがはいる。③バイクボランティア団体と連携して支援を行う）が役立ち、事務所に残っていたスタッフが対応にあたった。

新潟にいたスタッフは、すぐ課題に直面した。アレルギー対応の食糧は、名古屋の災害協定備蓄アルファ化米3000食と、ミルク（ニューMA-1）24缶などが調達できた。冬季の遠距離運転手の確保は困難だったが、新潟の地元FM局が募集したボランティアにお願いすることができた。トラックの調達、緊急車両の許可証の申請、燃料の調達など、幸運にも新潟の支援団体の協力で被災地に向かうことができた。

支援物資を積んだトラックは、13日に仙台市と盛岡の患者会のもとに到着した。支援物資を渡して状況をうかがうと、いずれも会員たちとほとんど連絡がとれない、とのことであった。

#### 2) 被災地の患者とつながらない！—SOSは発災後5日間で15件—

被災地は通信手段・交通の遮断と深刻なガソリン不足が続き、避難所や個人宅への自衛隊によらない配送は難しく、アレルギー支援は大変な困難を極めた。SOSの件数もその後は増えず、発災後5日間でわずか15件に留まった（3月末で26件）。この為、10日目以後の第二次支援は、避難所や役所などに支援物資を届け、同時に支援情報を伝える広報活動に力を入れた。アレルギーの会全国連絡会として4月3～4日に実施した「アレルギー相談110番」では、被災地はじめ全国各地8ヵ所の窓口が作られたが、電話件数は数件にとどまった。

そこで、改めてTV局、新聞各社に支援情報の掲載協力を求め、また、避難所などへのポスターによる周知が行われた。極端な燃料不足にもかかわらず、各地からバイクボランティアが集まり広報も徐々に広がり、沿岸各地へ支援物資を直接届ける体制が生まれた。支援物資は災害時協定の企業を中心に調達がすすんだが、支援物資を引き続きどう確保できるかは見通せなかった。

#### 3) 患者に届かない！7700食のアレルギー支援物資（名古屋市）

支援活動開始直後に厚労省を訪問し、各自治体のアレルギー用備蓄品を被災地に供出することを促していただくよう依頼した。同時に地元名古屋市にも要請すると、すぐに「(国の要請もあり)明日、アレルギー対応の

アルファ米 7700 食を仙台市に送る」との回答をいただいた。

しかしその後、仙台市などにそのアルファ米の所在を確認しても見つからず、結局一般物資に紛れてしまったことが判明した。その他数自治体分も同様であった。後日の確認では、出荷した自治体の伝票に「アレルギー一用」と記入されておらず、受入れ側もミルク以外はアレルギー一用として区別されていなかった。

毎日新聞では「仙台市はアレルギーに対応したアルファ米を 38 万食備蓄していた」（4 月 24 日付）と報道され、自治体のアレルギー用備蓄食糧を、アレルギーに患者にどのように届けるか課題が残った。

一方、湖西市のアレルギー対応アルファ化米 5000 食は、災害ボランティアコーディネーターを通じて「支援ネット」に被災地に届けるよう依頼があり、これらは被災地に配ることができた。

#### 4) 小児アレルギー学会など大きく広がったアレルギー支援

3 月 22 日、日本小児アレルギー学会に参加する医師と私たちが情報共有できるメーリングリスト (ML: Allergysupport) が開設された。これまでの災害時には、支援ネットや「アレルギーの会全国連絡会」（全国約 40 団体と個人が参加する組織）などが支援活動を行ってきたが、今回はその枠を超えて、専門学会の医師、企業、行政関係の方も連携して活動し、その情報連絡網として ML が活用された。また、災害ボランティア団体がミルクアレルギー支援に取り組むなど、関連団体にも支援活動が広がった。

アレルギー児の親などが Mixi や twitter を使ってアレルギー支援の呼びかけが開始され、ごく短期間に「twitter をみた支援したい」などと 1000 件を超える支援の申出が広がったことも大きな教訓である。

## 2. 第 2 ステージ（発災 1 ヶ月～3 ヶ月）

### 1) アレルギー支援の周知

この時期には、アレルギー支援を行っている情報を周知することが最大の課題となり、のべ 30 数人のバイクボランティアが 1 週間以上被災地に滞在し、地理に慣れた周知活動や支援物資を届ける活動を行った。

メディアの周知や避難所ポスターの貼りだしが始まると、『(山田町) 避難所ではなかなかアレルギー対応の離乳食が手に入らず、もちろん手作りできるような状況でもありませんでしたので、震災から半月ほどは硬いおにぎりをかじらせたり、ほとんど卒乳していたのに母乳を何度も飲ませて命をつなぎました。(1 歳 3 月・卵アレルギー)』、『(陸前高田) 避難所でパンやラーメンが出ると食べれないので、近所の避難所を回りおにぎりを探した。(17 歳・小麦・魚介類アレルギー)』と悲痛な叫びが伝わってきた。

救援依頼も増え始め (4 月 49 件、5 月 44 件)、8 月末まで 160 件の SOS のなかでは「メディアを見た (44 件)」「避難所でポスターを見た (41 件)」がトップ 2 位を占め、周知活動の重要性を改めて知った (表 2)。

### 2) 多様化するニーズ アトピー、喘息患者からも SOS

発災 1 ヶ月を過ぎると『(山田町) お菓子が欲しい (卵アレルギー)』、『(陸前高田) 誕生ケーキが手に入らないか』と普通の生活に近いニーズが出るようになった。『(多賀城市) 食物アレルギーで痒みの症状が出ている』、『(石巻市) 子ども 2 人の喘息の咳で特に夜は迷惑もあり、避難所を出て傾いている自宅に戻った (7 歳・4 歳)』と、疾患も食物からアトピー、喘息へと広がり、『(一時避難ホテルから) 朝夕はバイキングで何とか (食べるものを選んで対処) してきたが、最近お昼が麺の場合が多く食べるものが無い。ホテルに言えない (3 歳・小麦アレルギー)』、『(大阪市から) 原発のため、身一つで避難してきた。喘息・アトピー・食物アレルギーあり。何か提供していただけるのですか?』など長期化する避難生活や疎開先での問題もではじめた (図 1)。

多くの企業・個人から届く大量の支援物資は、物資保管先の確保や賞味期限、数量、アレルギー別の商品管理など新たな在庫管理の必要に迫られた。5 月までの 3 か月間、「支援ネット」に長期間従事するボランティアはじめ、毎日 10 人以上、のべ 40 名以上、多くの人々に支えられた。

### 3. 第3ステージ (3ヶ月以降)

#### 避難所から仮設へ 個別支援からアレルギー支援へ

被災者の多くが仮設住宅へと移り、被災地のボランティア団体などを中心に「仮設住宅対策会議」が開かれ、その中で地域のアレルギーの現状を伝えるといった情報共有・連携が不可欠となった。長期支援に備え、沿岸地域に新たな活動拠点の開設を余儀なくされた。

当初、現地の状況を把握するのが精いっぱいであったが、被災地を駆け巡る支援活動を経て、3カ月後、ようやく被災地にアレルギー支援ネットワークの被災地事務局（「東北事務局」）を開設することができた。それまでは毎月、1～2週間程度のボランティアを派遣し、その都度、宿泊場所の確保に苦労した。この時期の支援活動は現地責任者がおらず、ボランティアの献身的な活動に委ねられるという状況があり、活動には大きな困難を伴っていた。こうした状況を打開し、アレルギー患者からのニーズをより早く把握し、毎日計画的に支援活動を継続できるようにするため、被災地での事務局の開設は緊急の課題であった。「震災がつなぐ全国ネットワーク」を介して日本財団から車両支援（G-Glass）を受けることができ活動の範囲が格段に広がり、協力団体の紹介で大船渡市の気仙教育会館の一室をお借りし、常駐スタッフを置いて、中・長期的なアレルギー支援活動を展望した活動を開始した。名古屋の事務局からは、災害担当理事・栗木が、ほぼ定期的に、毎月1～2週間程度被災地に赴いて、スタッフとともに沿岸地域を走り回った。

これまでの個別支援とともに、地域ではアレルギーの理解を広げるために、保育園・学校、子育てグループや災害ボランティア団体などと連携した活動が始まった。子育てグループからは、被災後の活動の困難さに加え「アレルギーの知識が少なく対応に苦しんでいる」、給食現場では「支援物資を使ってアレルギー児に配慮した献立に工夫している（大槌町）」、「アレルギー児が多く、昨年からどう対応するか話し合っていた（大船渡市）」、「給食材料などアレルギー支援いただけるとありがたい（保育園）」、また小学校からは「大きな余震に備えアレルギー用アルファ米を備蓄したい。支援してほしい」と支援を求めるニーズが広がった。

9月以降、ぜん息患者の救援依頼が増え、企業、医療機関などと連携し「吸入器」を提供するなど、ぜん息患者支援の活動が始まった。

#### 【お届けした支援物資】

重症なぜん息患者への吸入器支援は、個別支援、医療機関を合わせて150台以上支援したほか、食物、肌着、マスクなど100種類以上の支援物資(1,700万円相当分)を、お届けすることができた。

#### 【アレルギー支援の周知】

大船渡市・陸前高田市・住田町のすべての仮設住宅を訪問し、アレルギー支援のポスターを掲示板や集会所に貼るなどの周知活動を行った。また、岩手県沿岸地域の保育園・学校を訪問し、アレルギー用のおやつや、給食対応食材の情報提供、試食品の提供、災害時の備蓄品などの提供を行った。



6/7 アレルギー食材を積んで  
釜石市内保育園訪問



2012.3.23 ぜん息用吸入器のお届け

### 【講演会やミニアレルギー講座の開催】

栄養士・保育士など専門職が、アレルギー児をサポートできるよう、大船渡市、釜石市でのアレルギー講演会をはじめ、ミニアレルギー講座を両市で13講座開催し、延べ180人の参加があった。



2011.11.13 アレルギー大学開講記念講演会・大船渡病院・瀧向先生

### 【アレルギー支援への理解を広げる活動】

(2011年6月名取市、参加人数 延べ約500人) 現地の災害支援団体と協働し、地元住民の朝市の会場で熱気球をあげる取り組みやアレルギー食の試食会を行った。

(2011年8月大船渡市、参加人数 延べ約400人) 熱気球をあげ子どもたちを励ますイベントに協力、アレルギー食の試食会、アレルギー支援の紹介を行った。

(大船渡市・陸前高田市の子育てグループへの支援) 毎月の定例会・イベントに参加・協力し、アレルギー患者のサポートを行った。



2011.8 大船渡市・熱気球イベント

## 2012年度の活動

### 【アレルギー相談】

岩手県気仙地域には、十分な診断を受けないまま食物除去を続けている子どもや、喘息・アトピーのコントロールが不十分な子どもが少なからず存在していた。専門的な知識と経験を持ったアレルギー専門医が地域住民のアレルギー相談を行うことで、不必要な食物除去や不十分な治療状況にあるアレルギー疾患児を見いだし、地域の医療機関で診断・治療を受けることが必要であった。一方、岩手県気仙地域にはアレルギーの専門医が不在であった。そこで、アレルギーの診療に意欲のある地域の若い小児科医と一緒に活動することで、専門的な力を育成して継続的な診療レベルの向上に資すること目的として、岩手県気仙医療圏（大船渡市、陸前高田市、住田町）において、県立大船渡病院瀧向先生をはじめ地元の医療機関や子育てサポーター「スマイル」、大船渡市、陸前高田市などの関係機関のご協力を得て、7月～11月に計6回の「アレルギー相談」を行った。

大船渡市 7/8. 8/19. 10/7. 11/11（県立大船渡病院・吉浜地区拠点センター・大船渡市保健介護センター）

陸前高田市 9/2. 10/8（高田竹駒地区コミュニティーセンター・自然環境活用センター）

担当医：あいち小児保健医療総合センター・アレルギー科医師 伊藤浩明・漢人直之

参加者合計 延べ58人

このアレルギー相談をすすめる中で、喘息用吸入器、スキンケア用品、寝具等の改善支援を求める患者についてはアレルギー支援ネットワークとして可能な生活支援もおこなった。その後、大船渡病院及び岩手医大小児科に所属する医師3人が、アレルギー相談及び診療を見学され、そのうち1人は、あいち小児保健医療総合センターにおいて約1週間のアレルギー研修を受けた。



10/8 陸前高田・アレルギー相談

### 【アレルギー講演会】

釜石ブロック保育所等協議会の要請を受け、7/14に、保育所全職員対象に「アレルギーに関する研修会」を行い、約60名の参加があった。講師は、同愛記念病院・小児科医師 増田敬先生に務めていただいた。

### 【仮設住宅など住まいの環境調査】

東北沿岸地域は喘息患者も少なくなく、震災後は喘息はじめアトピー患者の症状悪化が指摘された。このため、環境が大きく影響するアレルギー症状の悪化を防ぎ、健康増進を図る目的の一助として、9地域の仮設住宅（気仙地域）において、30世帯（呼吸器疾患患者を含む）を対象に、2012年9月から2013年3月にかけて「住まいの環境（モニター）調査」をおこなった。また、調査期間中、患者の要請に応じて喘息用吸入器、マスク、アトピー性皮膚炎用肌着、「ダニとりマット」など必要な生活支援も同時に行なった。

本調査により、仮設住宅の「結露」とそれによる「カビ」や「ダニ」の被害による様々な課題が改めて浮き彫りになった。そこで、引き続き2013年8月まで調査を継続し、1年間を通じた調査結果をまとめ、気仙地域の関連部署に報告し、仮設住宅の住民の健康増進をはかることとした。



大船渡市仮設住宅環境調査

## 2013 年度の活動

### 【アレルギーへの理解を広げる活動】

医療機関、自治体、子育て支援団体と協働で行った。

- i) 「アレルギー講演会と交流の集い」を開催した(6/30)(大船渡市)。

講師 同愛記念病院・増田 敬先生。

テーマ「こどものアレルギーと向かい合うための知識」

参加者は、患者家族、自治体職員、子育て支援団体の方など、60 家族。

午後は、アレルギー対応のアルファ米とカレーの試食会をし、個別相談会(12 組の患者家族が参加)を開催し、医師と管理栄養士が相談を担当した。



- ii) 「アレルギー勉強会」を開催した(10/15)。

NPO 法人子育てシブより依頼。(法人主催のママサロン(陸前高田市)において開催)

講師 理事・中西。

参加者は、20 家族と、スタッフ 5 名

- iii) 「アレルギー勉強会」を開催した(12/2)。

釜石市立平田幼稚園より依頼。参加者は、保育士 8 名と保護者 計 20 名。

講師 理事・中西

- iv) 「インターネットアレルギー大学」の無料配信を希望者に対して行った。

### 【若手の小児科医への研修支援】

あいち小児保健医療総合センターでの研修を実施した。

岩手県立大船渡病院小児科医が6月～9月に、岩手医科大学・小児科医が12月～1月に、あいち小児保健医療総合センター・アレルギー科で研修。住宅費の補助をした。

#### 【仮設住宅など住まいの環境調査】

2012年度より継続した調査を行い、結果を分析して、市の関係課や仮設の住民の方にフィードバックをする取り組みを行った。

4/4(木)～4/6(土)・・・ダニ及びダニアレルゲン量の測定、聞き取りによる環境調査、居室内の温湿度測定と、継続調査のお願いをした。



9/23(月)～9/26(木)・・・最終調査。ダニ及びダニアレルゲン量の測定、聞き取りによる環境調査、居室内の温湿度計の回収をし、1年間の調査の御礼をした。

ダニアレルゲンは、名古屋市生活衛生センターに解析を依頼した。

2014.1/6 中間報告書を、陸前高田市および名古屋市に提出した。

名古屋市生活衛生センターでのアレルギー分析結果は2014.3に届いた。最終的な調査報告は、元中部大学応用生物学部(須藤千春教授)、名古屋工業大学大学院工学研究科産業戦略工学専攻(水谷章夫教授)、アレルギー支援ネットワークが共働りまとめ、陸前高田市に報告を行う予定。

#### 追記

東日本大震災の発生直後からアレルギー患者の支援活動に奔走したアレルギー支援ネットワーク理事の栗木成治は、進行性癌の治療を受けながら2012年12月まで大船渡を拠点に活動を続けておりましたが、2013年4月5日に永眠いたしました。皆さまからいただきましたご厚情、ご支援に心より感謝申し上げます。ありがとうございました。



災害支援担当理事・栗木成治(いわき市保健所にて)

【参考文献】

中西里映子、栗木成治、伊藤浩明：大震災に備える課題は～アレルギー支援活動から考える～  
アレルギー・免疫 19(4); 558-565, 2012 (医薬ジャーナル社)

「寄り添いからつながりを」東日本大震災支援活動の記録Vol.1・Vol.2  
(震災がつなぐ全国ネットワーク)